キャラクター名
メリーナ・リーナリー

プレイヤー名

メインクラス	アコライト	**Lv.1:**		**レベル**	4
サポートクラス	アルケミスト	**Lv.1:**	アルケミスト	**性別**	
称号クラス				**年齢**	
種族	ヴァーナ			**境遇**	出世
出自（効果）	英雄			**目標**	友情

	筋力	**器用**	**敏捷**	**知力**	**感知**	**精神**	**幸運**
基本値	8	7	15	6	15	12	8
ボーナス	2	2	5	2	5	4	2
クラス修正	0	2	0	2	1	1	0
他修正							
能力値	2	4	5	4	6	5	2

HP	44
MP	55
フェイト	5

装備品		**射程**	**命中**	**攻撃**	**回避**	**物防**	**魔防**	**行動**	**移動**
右手									
左手	ハイクオリティシールド		0	0	0	5	0	-1	0
頭部	ビレッタ					2			
胴部	レザージャケット					4			-1
補助									
装身具	聖印								
能力値			4	0	5	0	5	11	7
スキル								1	5
その他									
総計(右)			4	0					
総計(左)			4	0	5	11	5	11	11
総計(両)									m
ダイス数			2 d	2 d	2 d				

	能力値	スキル	その他	合計	ダイス数
トラップ探知	6			6	+ 2 d
トラップ解除	4			4	+ 2 d
危険感知	6			6	+ 2 d
エネミー識別	4			4	+ 2 d
アイテム鑑定	4			4	+ 2 d
魔術判定	4			4	+ 2 d
呪歌判定					+ d
錬金術判定	4			4	+ 2 d

所持品	
鞄類↓	毒消し
ベルトポーチ	毒消し
バックパック	MPポーション*3
ポーションホルダー	HPポーション*3
ハイHPポーション	ハイMPポーション*2
ハイHPポーション	
ハイHPポーション	
万能薬	
万能薬	
聖水	
火酒	

現在重量： 15		
最大重量： 15	所持金： 185	預金・借金：

スキル名	**SL**	**コスト**	**タイミング**	**射程**	**対象**	**判定**	**制限**	**メモ**
オーバーパス	★	-	パッシヴ	-	自身	-		
効果： 狼族、移動力+5m、行動値に+1								
プロテクション	4	3	DR直後	20m	単体	自動成功	1/MP	
効果： 対象が受ける予定のダメージに-[SLd]								
アフェクション	1	-	DR直後	20m	単体	自動成功	1sn1	
効果： ダメ0								
ヘイスト	2	3	セットアップ	20m	単体	魔術	-	
効果： 行動値に【+SL*2D】								
ポーションピッチ	1	3	メジャー	20m	単体	錬金術	-	
効果： ポーション投げるよ！								
エリクサー	1	-	パッシヴ	-	自身	-	-	
効果： ポーションの効果に+1D								
ホーリーウェポン	2	3	メジャー	20m	単体	魔術	-	
効果： 武器攻撃のダメージに+【SL*3】								
ヒール	1	4	メジャー	20m	単体	魔術	-	
効果： HPを【3D+CL*3】								
シンセサイゼーション	1	5	ムーブ	-	自身	自動成功	-	
効果： ポーションを二個扱う								
クイックヒール	1	5	イニシアティブ	-	自身	自動成功	-	
効果： ヒールをイニシアティブで使用								
オピニオン	1	-	パッシヴ	-	-	-	-	
効果： 交渉、説得の精神に+1D								
ファーマシー	1	-	アイテム	-	-	-	-	
効果： 三個のHPポーションを取得								
マジカルハーブ	2	-	アイテム	-	-	-	-	
効果： 二個のハイMPポーションを取得								
ファーストエイド	1	-	メジャー	至近	単体	器用	-	
効果： 成功でHP1で復活								
効果：								

狼族の英雄から産まれた彼女は、一言で言えば、異質。
表だって何をすることもなく、時折家から出ては何かの実験を繰り返す。そのことを誰に明かすことも無く、彼女はひたすら研究を続けていた。
時折人の前に出た彼女は、尋ねられるとこう言う。
「天使を呼ぶための機械を作っているんだ。これで消せる。人の苦しみも、空の彼方へ」
そんな彼女が英雄の家から放逐されるのも、当然のことだったのだろう。
研究一辺倒だった彼女は右も左もわからず、何処で何をして良いのかすらわからず、飢えた。
それを救ったのは一人の男だった。
彼は彼女を温かく包み、食事を与える。
「応援するよ。その機械作り」本心かはわからないが、男はそう言った。そして、「でも....」という言葉の後に、彼女に一つの生きる道を示した。
そうして彼女はこの道を歩み、ここまで歩いてきた。
やがて落ち着き、彼女は「機械」をもう一度作ろうと思った。
そしてあの男を思い出す。お礼、そう。お礼をしなければ。
もう一度男の家を訪ねるも、男はもうそこには居なかった。
それから彼女は男を探している。願わくば、その男と、空に「機械」を向けるために。